



～kakkou(格好)良しエピソード受賞 10 作品～

私の祖父母は農家さんです。夏はきゅうりやトマトに茄子オクラ、冬は長ネギ白菜ほうれん草と、一年中、広大な畑とビニールハウスを、祖父母たった2人きりで管理しています。

ある日、きゅうりの苗を植えるお手伝いをしました。毎年春、夏にビニールハウスで行われる苗植えは、私の想像を遥かに超える体力勝負で、まるでサウナの中で走り回っているような過酷さでした。

当時高校生だった私は、体力には自信がありましたが、それでも暑さと普段使わない筋肉の酷使で、苗植えが終わる頃にはバテバテになっていました。しかし、祖父母は全くバテていないどころか、その後もすぐ他の作業に取り掛かり、いつも通り、暗くなるまで一生懸命働いていました。

物心ついた時から、ずっと当たり前のように食べてきたきゅうりの始まりを、その日初めて体験して、祖父母の格好良さを知りました。80歳を超えた今でも、**2人は変わらず農家さん**を続けています。2人の姿を見ると、私も頑張ろうと思えるくらい、本当にかっこよくて、自慢の祖父母です。

私のおばあちゃんは裁縫がとても得意です。

手縫いやミシンを使って何でも作ってしまいます。私は今中学一年生ですが、私が幼稚園の入園の時から、手さげ袋、シューズ入れ、お弁当袋、ナフキン…等、全ておばあちゃんの手作りでした。

小学校に上がっても、給食袋、ナフキン、体操服入れ、部活の袋など、相変わらず全ておばあちゃんの手塚です。中学生になった時も、また入学で必要な物で作れる物は全部おばあちゃんの手作りで、ちゃんと布のデザインも、キャラクター→花柄など→無地…と年齢に合わせて変えてくれます。

日常に必需品のマスクも全ておばあちゃんの手作りです。もちろん身体が大きくなるにつれてサイズも変えてくれます。

そんなおばあちゃんを尊敬していますし、とてもカッコいいと思います。

これからもいつまでも元気でいて欲しいです。

私の祖父の趣味はウクレレです。結構な腕前で、日本の歌謡曲から本場ハワイの曲まで軽やかに陽気な音を響かせてくれます。縁側で祖父のウクレレを独り占めするのが、私は子どもの頃から大好きでした。

「おじいちゃんはなんでウクレレがそんなに上手なの？」祖父の口から語られたのは、震災で電車に閉じ込められた経験でした。いつ外に出られるのか分からない状況で、窓を開けていても次第に暑くなる車内。人々の疲れは溜まり、苛立ちや不安は高まり、乗客同士の喧嘩も起こっていたと言います。そんな中、祖父は偶然持ち運んでいた、当時まだ習い立てだったウクレレを弾き始めました。まだ拙い演奏でしたが、耳から入る独特な癒しの音色と、ウクレレの小ぶりなフォルムが心を和ませ、段々と車内は落ち着きを取り戻していったとのこと。それ以来、祖父はもっと、目の前の人に喜んでもらえるように、ウクレレの腕にさらに磨きをかけたそうです。

受け入れてもらえるか分からない状況下で、自分ができるところを見つけ、実行する。祖父の行動はとても勇気が要り、だからこそ本当に格好いいと思います。この話を聴いてから、私も趣味の handmade を今まで以上に練習するようになりました。目の前の人を喜ばせたい、そしていざという時に祖父のような勇気ある行動ができる大人でありたいと、ウクレレの音色を聴く度に思います。

私のおばあちゃんはとっても元気な 91 歳です。

自分の健康の為に…毎日庭の草むしりをしていて、畑で野菜も作っています。でも、最近では少し足がふらつくことも増えて、出かける時は杖をつくことも増えてきているのですが…

去年、里芋掘りをした時のことです。里芋の種類の中でもとても大きい株になる「たけのこ芋」という里芋を私が掘り始めました。でも周りから掘っても掘ってもビクともせず…腰も痛くなり、心も折れ…諦めかけた時…

当時、90 歳のおばあちゃんが現れました（笑）

「ちょっと、やらせてみい。」その小さくなった身体のどこにそんな力があるのか…と思う程、クワでみるみる深く掘り、見事に立派な里芋が採れました。

「まだまだおばあちゃんには勝てないな…」と私が言うと、「なんでもコツがあるんだよ。長くやればわかるようになるんだ。」と汗を拭いながら私に言いました。

クワを肩に担いで、歩くおばあちゃんの背中では年々小さくなってきていますが…

私にはとっても大きな背中に見えています！これからもかっこよく、長生きして欲しいです。

私は 2 年前の 66 歳の時に介護の相談支援の職を自ら定年と定め退職しました。

その後、ゲートボール、グランドゴルフ、ペタンク、ハイキング、仲間と散策に勤めました。

しかし、どうしてもしっくり来ないのです。仲間とのスポーツやお喋りは楽しいでも何かしっくり来ないのです。

そこで、昨年 4 月から市の手話奉仕員養成講座に参加してみました。地元の高校生、近隣市にある大学生も参加しており講習会のメンバーの中では、私が一番歳上かなと思う位のメンバー構成でした。20 人前後のメンバーで、週 1 回、夜の 7 時から 9 時まで 1 年間(2 年目の人もいます)悪戦苦闘しながら必死に若者に付いて学習している状態です。

また、昨年 5 月からは介護施設で週 3 回午前中のみ、今度は相談支援ではなく現場で認知症のお年寄りに関わる仕事を始めました。80 歳代 90 歳代の先輩と一緒に掃除をしたり洗濯をしたり、健康体操をしたりと、ちょっぴり大変な面もありますが楽しい日々を過ごせています。お年寄りの笑顔とても素敵なのです。

また、若い職員とのコミュニケーションも上手く取れて働けている事がワクワクしてとても楽しく感じています。

明日は、どの職員さんと組んで仕事をするのかな？と、思うとワクワク、ドキドキします。

教わる事が多くなって来てしまったけれど、いつまでも健康でカッコイイおばあちゃんでありたいと思っています。

今、自分の出来る事をやる。それが 1 番幸せな事だと思います。

主人は 10 年前に亡くなり、ただ家には太ってしまうと、翌年の 52 歳から余りお金がかからず何か健康に良い事かと思いマラソンを始めました。全くの陸上経験も無く思うがままに走って大会などに参加したりしておりました。このコロナ禍で大会は中止になり私も去年で還暦になってしまいました。

還暦の記念に「大会で走りたい。」と思い探してなんとか開催された昨年のぐんまマラソン大会に参加させて頂きました。フルマラソンは、6 度目の大会となり 3 時間半を目標にして練習して来ました。この歳では、遅くなることはあってもタイムを縮める事は無理だろうと思いましたが、久々のマラソン大会で嬉しくて気持ちよくて目標だった 3 時間半をなんと切る事ができたのです。夢が叶いました。

おまけに、なんと年代別で一位!

私よりも沢山速い人がいらっしゃいますが、他の大会に行ってしまった為か、運が良かったです。

今では、息子や娘も走っていて、5 歳と 2 歳の孫までも「一緒に走る〜!」と言ってついて来ます。こっそり行こうとすると泣かれたりして…

まだ、まだ、夢と希望は持ち続けて行きたいです。

元気で、うちのお婆ちゃんカッコイイ! って言ってもらえる迄、がんばろうと思います。

カッコ良いお婆ちゃん、少しでも長く居たいと思います。

私（61歳）の母方の祖母（亡くなっています）の話です。

当時、私は大阪府に住んでいました。私の両親の故郷は徳島県です。私が小学生低学年の頃と記憶してるのですが、何の病か？母が入院してしまいました。父と3歳年上の兄と私は不安の中で過ごすことに。そんな時、いち早く駆け付けてくれたのが祖母でした。

大鳴門橋も明石大橋も夢物語の当時、大阪⇄徳島はフェリーに乗船しなければ行き来は出来ません。下船してから電車・バスの乗り継ぎで、祖母には大変な行程のはず。只々、入院した娘家族のことが心配という、その気持ち一つで助けに来てくれました。それだけでも嬉しいのに、祖母の背中のリュックサックの中には沢山の野菜とお菓子が入っていました。

重いリュックを降ろしてからの祖母は、直ぐさま炊事洗濯とやり始め。私の目には頼もしく写ったものです。今で言えばワンダー・ウーマンの様な格好いい女性でした。明治の時代に生まれ、戦前・戦中・戦後と生き抜いた祖母のことを忘れることが出来ません。貴女のような『格好いい』お祖母ちゃんになれるよう、私も頑張ります。

私の『じいちゃん』は、最高にかっこいいです。

整ったロマンスグレーの髪に普段はジーンズを履き、人と会うときや少しお出掛けするときは、ジャケットを羽織り、ビシッと決まっている92歳です。でも、かっこいいのは見た目だけではありません。じいちゃんは口数の多い方ではないけれど、毎回ツボを押さえてくるような発言で、幼い頃から沢山笑わせてもらったり、心が温かくなったりしてきました。

自慢をしたい話は山程あるのですが....

私がまだ学生だった頃です。毎年年越しはじいちゃんの家で過ごしていました。その年は大晦日にバイトがあり、夜の9時過ぎにバイクで向かいました。特に寒い日で、手袋をしていても手がかじかむ中、雨も降ってきて一刻も早く帰りたい、ただそれだけを考えていました。

じいちゃんの家が見えたとき、ガレージに人影がありました。『寒かったろ』そう言ってじいちゃんはタオルを差し出してくれました。たった一言でしたが、冷たくなった身体と心に染みすぎて涙が溢れました。この寒い中、バイトが終わる予定の時間しか知らせてないのに、何分待っていてくれたのだろう。泣いてるのバレてないかな、そんなことを考えながら身体を拭く私の隣で、じいちゃんはバイクを拭いてくれていました。

現在遠方に住むじいちゃんとは年に2度しか会えません。でも、スマホを使いこなすじいちゃんとは父親よりも頻りに連絡しあっています。じいちゃんがいつまでもいつまでも元気でいてくれることを心の底から願っています。

じいちゃんは私の自慢です！

私が小学2年生の時。毎朝決まった班で登校が決まりでした。その日は珍しく朝寝坊をし、バタバタ準備を済ませさあ出発！家を出るとすぐ信号、横断歩道があり、渡りきった先が集合場所でした。およそ20m。運良く青信号！！行ってきマース！と兄と駆け出し渡りきったその時、「忘れてるよー！！！！」

え？と思い振り返った瞬間目の前にランドセルがぶっ飛んできました。信号はすでに点滅しており、渡るのは危ないと思ったのか、おばあちゃんが20mという距離をものともせず、ランドセルを思い切り投げてきていたのです。その時は「ありがとー！！！」と受け取り何事も無かったかのように班に混じり無事登校できました。

私が19歳の年に祖母は亡くなってしまいましたが、子供ながらに強烈な出来事だったのでよく覚えています。ありがとうございました。

私が小学6年生の冬休み、各自お正月の凧を作って持ってくるという宿題がありました。突然凧と言われても、子供の頭ではそれをどうやって作り出すかなど思い浮かぶはずもなく…。友達とそのことについて話すと、殆どの人は「お店に工作用のキット売ってるじゃん。それ買って作るよ」とのこと。

なるほどなあ、私もそうするしかないな—と思いながら母親に凧の宿題について話すと、「ふうん、面白い宿題だねえ。おじいちゃんに聞いてみたら？何かアドバイスくれるかもよ」

私の母方の祖父は手先が器用で、尚且つものづくりも好きな人でした。こけし作りが趣味だったほどです。そこでお正月の挨拶に祖父宅へ遊びに行った時、凧の宿題が出たことを話してみると…

「凧かあ、ただ学校に出すだけじゃなく、ちゃーんと飛ばないとつまらないよなあ、みかちゃんに恥かかせられないしなあ」と言ったと思うと、「ちよっと待ってな」とおもむろに庭へ。何をするつもりかと思っていると、庭に生えている細い黒竹を数本、取ってきました。

「これを細く切って、たけひごにして、じいちゃんが骨組みつくてやるからな」…え、竹から！？ぽかんとする私と私の母を尻目に祖父はてきばきと竹を更に細く均一な太さのたけひごにし、あれよあれよという間にそこへシワひとつなく障子紙を貼り、「ほれ」と、**立派な白い凧を作り上げて**しまいました。

「ここに絵を描けば、みかちゃんの凧だ」と。私はそこに、その年の干支である申の絵を描き、おじいちゃんに見せました。「みかちゃんは上手だなあ。ただ白いだけだった凧が、ほら、こんなに嬉しそうだ。学校に持って行きな。」

新学期が始まり、大多数の人が提出するプラスチックの凧の中で、わたしの竹と障子紙の凧は異彩を放っていました。何これ、すごい！と驚かれる度に、おじいちゃんが作ったのと答える私は誇りに満ちていたと思います。そして私の凧は、だるま屋の息子の作品と並び、学年の最優秀賞に。祖父に早速報告すると、「みかちゃんの絵の腕だなあ、さすがだ。じいちゃんは大したことしてないよ」ととても嬉しそうに笑ってくれました。

本当にかっこよかった。今はもう天国に行ってしまった祖父だけれど、いつまでもいつまでも色褪せることなく覚えているのでしょう。あんなにもあっさり手間のかかる工作を作り上げ、孫に華を持たせてくれた、大好きな祖父のことを。